

## 豊かさのメタモルフォーゼ —経済の論理から、文化、そして生命の論理へ—

中野 佳裕

早稲田大学地域・地域間研究機構次席研究員

### 1. はじめに——思索の原点から

今日は西川潤先生ともっと話したかった私の学問的探求の原点と今後について語りしたいと思います。私は1977年に山口県光市の東端にある室積という半島の町に生まれました。瀬戸内海に面した小さな半島で、古くは小さな漁村でしたが、平安時代末期に建立された普賢寺を中心に市が栄えるようになり、江戸時代中期には北前船の中継地として商業が栄えました。半島を南北に通過する海商通りには江戸時代後期～末期に創業された古い商家の建物が今でも残っています。漁港周辺の海岸線は戦後の護岸工事のためコンクリートとテトラポットで整備されていますが、半島の先端にある峨眉山周辺は自然のまま残されており、クサフグの産卵場所となっています。町並みの中にも自然の中にも近代化する以前の室積半島の歴史の痕跡を見つけることができます。

海商通りの北端には早長八幡宮という神社があり、神社の前には漁港があります。その周辺の集落は宮町と呼ばれていますが、私の実家はそこで六代にわたって中野昌晃堂という和菓子屋を営んできました。嘉永5年（1852年）創業のこの店は、宮大工によって建てられました。この辺りの商家に特徴的な城造りという建築様式で、釘を一本も使わず、半島の地形と気候を考慮して天然の風が吹き込むように設計されています。和菓子作りは一部機械化されたとはいえ、生地を練ったりする基本的な工程には先祖代々引き継いできた道具と技術を使っていました。

伝統的な商家に生まれ育った私は、幼いころから地域の生活が多様な生業で構成されていることを経験的に学んできました。また、私の代を含めれば少なくとも七世代は同じ土地で暮らしていますので、祖母や父から昔の室積の生活の様子とその変化について話を聴く機会も多かったです。その中でも特に印象に残っていることが二つあります。一つ目は、室積半島や周辺の島は瀬戸内海の恵みに依存した循環型の生活を営んでいたことです。戦後に海岸がコンクリートやテトラポットで埋め立てられる前、半島を囲む浜辺には大量の海藻が打ちあがってきました。室積半島や周辺の島では、これらの海藻を天日干しした後、畑の肥料として使っていました。海藻のミネラル分によって畑の土が豊かになるのです。同様に、この地域では江戸時代よりイワシが大量に獲れていましたが、父親の子ども時代の頃までは、地元ではイワシは食べるものではなく、畑の肥料として使われていたそうです。イワシを肥料として使う習慣は今では廃れてしまいましたが、海藻に関しては今でも周辺の島では続けられています。

二つ目は、地域の自治意識の高さと相互扶助の様々な組織の存在です。私の家のある宮町では、昔から冠婚葬祭を町ぐるみで行う習慣がありました。早長八幡宮の鳥居や囲いは地元の網元や商家の出資に

よって作られており、古いものでは安政の時代のものがあります。また、半島から8・5キロ沖に出たところにある牛島は豊かな漁場をもつ漁村として発展した小さな集落ですが、藩政の時代から明治～昭和の時代に至るまで、漁港の波止は藩や国の支援を受けることなく、地元の漁師たちが頼母子講を組織し、共同で建設・管理してきたものです。天保13年（1842年）に最初の波止ができ、昭和初期までには14の波止がこの協同組合によって作られました。現在ではそのうちの6つが残っています。

## 2. 地域開発への疑問

私の学問の原風景には、以上で述べた故郷での生活があります。郷里の民俗学者・宮本常一は『民俗学の旅』（1978年）で「郷里から広い世界を見る。動く世界を見る。いろいろの問題を考える。私のように生まれ育ってきたものにとっては、それ以外に自分に納得のいく物の見方はできないのである。」と述べています。私にとってもそれは同じで、故郷での生活の内側から出てきた問いに答えるためにずっと研究を続けてきました。

私が経済とは何かを考えたいと思った直接のきっかけは、実家で製造された和菓子が店頭に並ぶとき、モノづくりの現場で練り広げられる職人と素材との様々な物語や我が家の生活風景が捨象され、価格という記号で意味づけられてしまうことに驚きを感じたからでした。その時以来、市場経済とそれを支える資本主義社会のメカニズムについて考えたいと思ったのでした。

このように経済に対する原初的な問いは家庭環境の中から生まれたのですが、同時に開発に対する問いは郷里の環境の中から生まれました。故郷の風土的個性と独自の自治の文化を知れば知るほど見えてくるのが、戦後の地域開発の問題でした。

1982年、5歳の時に隣町の上関町に原発建設計画がもたらされました。原発建設が計画されている室津半島の田ノ浦は、家の裏の浜からもよく見えます。その先には原発事故が起きたならば最も被害を受ける祝島がある。建設計画は上関町だけでなく、周辺地域である光市、そして室積の住民も分断しました。国策の一環として外部からもたらされる開発計画になぜかくも地域住民は翻弄されなければならないのだろうか。特に気になったのは、対象地域に暮らす住民が「低開発地域」に分類され、彼らの生業である農業や漁業が「食えない生業」として電力会社に説得させられていることでした。

開発問題は、純粋に経済学的な問題である以上に地域の自治に関わる政治的問題であり、文化に関わる問題でした。ハイデッガーは人間を「世界内存在」と定義しましたが、今から振り返れば、私が十代の頃から考えようとしていたのは、現代人の世界内存在を宿命づける〈開発〉と呼ばれる時代精神の抗い難い魔力と、そこから自由になる方法ではなかったかと思われれます。

この問いを探求したいと思って大学では経済学を学びましたが、標準的なミクロ経済学とマクロ経済学の教科書が教える市場経済の法則や人間像は、故郷のコミュニティの現実や伝統職人業のものづくりの現場について何も語っていないように思われて、馴染むことができませんでした。また、東京の大学に進学したからでしょうか、大学が教える経済学も開発学も市民社会論も、都市生活を中心に世界を見ているような気がしてなりません。故郷の生活では、全てのものが有機的につながっています。実家には半島の地形と気候を常に感じる居住空間があり、住居の素材となる木材や石や瓦には七世代にわたる地域の歴史の痕跡があり、半島や周囲の島々には海と陸、漁業と農業と商業が循環する生活がある。しかし、大学でどれだけ専門的な学術用語を学んでも、故郷の豊かな実在世界を的確に表現する言

葉を見つけることはできませんでした。

### 3. セルジュ・ラトゥーシュ『世界の〈西洋化〉』を読む

フランスの哲学者セルジュ・ラトゥーシュの著作との出会いは、経済学の言語秩序に苦しんでいた私を解放してくれました。1960年代以降、ラトゥーシュは西アフリカの開発問題をフィールドとする一方で、科学認識論（エピステモロジー）を基礎に経済学のパラダイム研究を続けていました。文化人類学や精神分析学の知見を取り入れながら科学認識論をより幅広い文化論へと発展させたラトゥーシュは、経済学の概念体系が近代西洋文明特殊のものであり、植民地主義から第二次世界大戦後の国際開発体制にいたる過程でこの西洋特殊の世界認識方法が普遍化したことを明らかにしました。

彼のこのような考え方が最も体系的に示されているのは、1989年に刊行された『世界の〈西洋化〉』（Serge Latouche, *L'occidentalisation du monde*, Paris, La Découverte, 1989）という著作です。同書で提出される「近代性＝世界の〈西洋化〉」というテーゼは、近代性のグローバル化を単純化してとらえているとの批判もあります。しかし、それでもやはり、第二次世界大戦後の「開発」の時代において近代西洋起源の経済発展という観念が、人類の「共同運命」として認識論的・文化的覇権を握るようになった過程を的確に捉えている良書だと思います。

特に私が注目したいのは、同書でラトゥーシュが *la culture culturale* と *la culture culturelle* という二つの文化概念を対比しながら世界の〈西洋化〉の過程を分析している個所です。*La culture culturale* とは、生活術としての文化のことです。人類史の中では様々な社会が存在しますが、各社会はその歴史的局面において直面した生存の問題に対する応答として、様々な生活術を発展させてきました。例えば各共同体の中で歴史的に継承される生活の知恵、技術、コスモロジーなどがそうです。人類史を振り返ると、生活術としての文化は身体を媒介した自然界との交感の中から生まれ、民衆の日常的な知恵（コモン・センス）として共同体の中で分かちあわれてきました。言い換えると、*la culture culturale* はイヴァン・イリイチのいう「ヴァナキュラーなもの（*le vernaculaire*）」に相当します。

これに対して *la culture culturelle* は、西洋文明において生成した美的表象としての文化のことです。古代ギリシャのプラトン哲学以来、西洋思想は精神と物質を分離して捉える二元論的世界観を発展させ、文化を精神の次元に還元しました。その傾向は近代以降さらに徹底化し、18～19世紀には知識人の教養文化や芸術作品の領域に狭められてしまいます。20世紀に消費社会が誕生してからはこの狭義の文化は大衆的な消費財として商品化されます。そして消費社会のグローバル化とともに、文化産業の中で記号化された文化表象や多文化主義の言説が「消費」されるようになりました。

ラトゥーシュは、開発の時代に美的表象としての文化が世界的影響力をもつことで、世界の様々な地域で育まれてきた生活術としての文化が破壊されたと主張します。世界の多くの人々が消費社会の生産する文化商品を消費することで、人々は自らの生活を自律的にデザインしていく文化の力を失ったと。ゆえに開発は「文化破壊（*déculturation*）」を引き起こすのだと。

彼のこの議論は一見、非西洋文化や近代以前の生活に対するロマン主義的解釈のように思われますが、注意深く議論を追うと、そうではない含意が見えてきます。それは、彼が言うところの「生活術としての文化（*la culture culturale*）」は、西洋思想の伝統にあるような精神と物質の分離を前提としない実在論的な文化概念であるということです。つまり、「生活術としての文化」とは、実在系に存在する

人間以外の生き物やモノとの交感の中から生成される生活デザインの知識や技術のことであり、その深層には、かつて哲学者・中村雄二郎が〈南型知〉と呼んだ、体性感覚に根差したコスモロジー（有機的宇宙の認識）が存在するのです。ラトゥーシュが主張する「世界の〈西洋化〉」とは、世界の様々な社会が生存の問題への応答として育んできた「实在系を全人格的に理解する深層の知のシステム」が、西洋文明のロゴス中心主義とその延長に台頭した資本主義経済によって破壊され、实在系とのコンタクトを失った世界が現れたことを指しているのです。

ラトゥーシュのこの視座は、消費社会のグローバル化によって地球環境破壊が深刻化する21世紀においてより現代的な意味をもってきます。次節ではこの点について説明します。

#### 4. 豊かさのメタモルフォーゼ

「開発」は近代西洋特有の社会デザインです。それは人類の経済的繁栄を目指して消費社会のグローバル化を推進してきましたが、同時に实在系としての地球の持続可能性を破壊してきました。この破壊の過程には主に二つの特徴があります。一つ目は、経済人類学者のカール・ポランニーが明らかにしたような「市場社会化」の動きを加速化させることで、实在系を構成する人間—他の生き物—モノの有機的関係を分断し、商品化してきたこと。生命の商品化は、1980年代以降の新自由主義政策の覇権の下で一層徹底化してきています。

二つ目の特徴は、生物経済学者のニコラス・ジョージエスケ＝レーゲンが分析するように、経済過程はエントロピー増大の過程であること。大量の熱エネルギーを利用する工業的経済活動のグローバル化は、生産・消費過程において生物圏で処理不可能な量の廃物を生み出し、今やその余分なエントロピーが生物圏の均衡を破壊するにいたっています。人類が地質学的影響力を行使するような時代に突入したことから、近年、産業革命以降の時代を「人新世 (the Anthropocene)」という新たな地質学的時代区分で捉えようとする動きも科学者たちの間で議論されるようになってきています。

両者は「開発」という社会デザインがいかにして地球という实在系——人間を含む——の存在の可能性を破壊してきたのかを例証しています。今日、世界の批判的開発学者や哲学者の間では開発パラダイムの限界が広く共有されるようになっており、国連主導で議論されている「持続可能な開発」とは別の理論的前提から持続可能な未来のデザインの可能性が模索され始めています。このオルタナティブな未来構想は「トランジション・デザイン」と呼ばれるものです。

トランジション・デザインについては、コロンビア出身の人類学者アルトゥロ・エスコバルの近著で詳しく議論されています (Arturo Escobar, *Designs for the Pluriverse*, London and Durham: Duke University Press, 2017)。トランジション・デザインが重視するのは、存在論的次元から社会デザインを問い直すことです。17世紀の科学革命以降、近代西洋文明は人間の世界と自然の世界を分離して捉える二元論的存在論に基づいて社会をデザインしてきました。開発パラダイムはこの近代西洋特有の存在論の上に成り立っており、経済発展の名の下に生命世界を商品化してきました。トランジション・デザインはこの人間中心主義的な存在論を解体し、人間を生命の網の目の中に埋め込みなおす「関係中心の存在論 (relational ontology)」に基づき未来社会のデザインを構想しています。消費社会は实在系を経済成長のための資源として道具化しますが、関係中心の存在論では人間の生活を脱商品化し、实在系に埋め込みなおすのです。

現在、トランジション・デザインは、非西洋社会の非近代的・非資本主義的な生活文化に内在する実在系と調和する生活術の再評価に始まり、その深層にある人間と人間以外の生命との存在論的関わりを明らかにする方向で研究が進んでいます。これは経済の論理から文化、そして生命の論理へと視点を深層の実在系へと移していく過程だといえるでしょう。

今後の私の研究課題は、トランジション・デザインの国際的研究の中で経済学者・玉野井芳郎の地域主義の現代性と可能性を探求することです。1970年代後半に玉野井は、中央集権的開発体制から地域分権型のエコロジー社会へと日本の経済社会体制の移行を構想し、それを地域主義という思想運動として推進しようとした。地域主義の基礎には生命系の経済という独自の存在論をもつ経済理論がありました。玉野井の地域主義は、生命系という生命の論理の理論的探究から始まり、それを各地域で具体的に表現する文化の論理としてコモンズを再評価していきました。つまり生命の論理から文化の論理へというアプローチです。玉野井の地域主義を日本独自のトランジション・デザインとして、グローバル思想史の中で検討してみる。そうすることで、世界のトランジション・デザイン研究のさらなる多元化が進み、異なる言語圏との知的対話が深まることで、実在系をとらえる文化の論理と生命の論理のヴァリエーションが多様化していくのではないかと思います

そしてこのような知的作業の結果、経済の論理とは全く異なる位相から実在系に内在する「存在の豊かさ」を表現する言葉が生まれるのではないかと考えています。私が故郷の生活で経験したことは、海も半島も島も、人間も他の生き物もすべてがつながっている世界の有限の無限とも呼べる豊かさでした。この関係の世界を維持してきたのは地域の生活文化でしたが、地域開発と市場経済の商品化の論理はそれを分断するものでした。わたしがこれからも考えていきたいのは、資本主義経済の商品化の論理に抗って、実在系の関係の世界をとらえていく言葉の獲得と、そのような新たな言葉によって未来社会をデザインしていくことです。このことを最後に、西川先生に感謝と共に伝えたいと思います。